添付資料　各先生方の実践記録

① 小学部１年（音楽科）　渡部先生

② 小学部１年（国語科）　山本先生

③ 小学部2年（国語科）　東田先生

④ 小学部3・4年（図工科）　ジン先生

⑤ 小学部3年（総合）　福島先生

⑥ 小学部3年（総合）　水口先生

⑦ 小学部3（保健指導）　堤先生

⑧ 小学部3年（理科）　江口先生

⑨ 小学部4年（英会話）　マーラー先生

⑩ 小学部4年（社会科）　岡本先生

⑪ 小学部4年（総合）　久保田先生

⑫ 小学部6年（社会科）　若竹先生

⑬ 小学部6年（理科）　松川先生

⑭ 小学部全学年（考察）　加藤先生

⑮ 中学部１年（国語科）　富永先生

⑯ 中学部2年（数学科）　稲川先生

⑰ 中学部3年（英語科）　沖本先生

⑱ 幼稚部・小学部（図書）　副島先生

遠隔授業実践の事例と考察（渡部・小学部１年・音楽科）

◎　iPad と PC の連携による画面共有を用いた小学校 1 年生（音楽科）の授業展開の事例

１．本時のねらい　◎鍵盤ハーモニカの基本奏法を身に付け、音の高低や長短、強弱などを工夫していろいろな音を吹くことができる。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援と◎評価
１．「みつばちハニーのぼうけん」を場面や様子を想像しながら聴き、鍵盤ハーモニカの音色のよさに気付く。 	○zoom と iPad を連携させ、iPad の画面と音声を共有した上で、OneNote および Apple music アプリを用いて、教科書の画面と音声を配信する。 ・教科書の①～④の挿絵を共有画面上で示しながら聴かせる。 ・曲調の変化に合わせて、身体を動かしながら聴いてよいことを伝える。
２．鍵盤ハーモニカの基本奏法を覚える。 	○zoom と iPad を連携させ、iPad のカメラアプリを用いて、教師の構え方や指の置き方を画面共有で示し、模倣させながら楽器の組み立て方、構え方などを指導する。
３．音の高低や長短、強弱などを工夫していろいろな音を吹く。	○教科書の「いろいろなおとのれい」を示しながら音の高低や長短、強弱などを変化させた様々な音を吹き、（1 人ずつミュートを解除して演奏し）聴き合う。 ◎音の高低や長短、強弱などを工夫していろいろな音を吹くことができている。
4.　本時のまとめとふりかえり	○本時の学習の流れをふりかえり、まとめとする。

３．上記授業ならびにこれまでの遠隔授業実践を通しての成果と課題

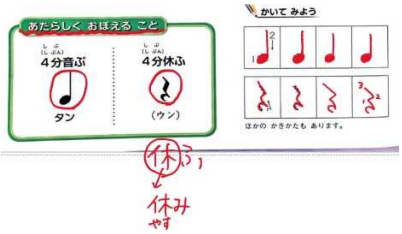
４月当初、実技教科である音楽科の授業を遠隔授業でどのように行ったらよいのか、果たして本当に行うことができるのか、何とも悩ましい状況であった。しかし、試行錯誤しながら継続して授業を行い、使用する機能や提示方法を改良しながら授業を進めてきた。これまでの取り組みにおいて感じた成果と課題は以下の通りである。

【成果】

・端末という 1 つの情報源を通してすべての情報をやりとりするため、教材の提示がスムーズにでき、視覚的にもわかりやすく示すことができる。

・Apple music アプリに、全学年のすべての教科書準拠 CD データを入れてしまうことで、容易に目的の演奏を共有できるようになった。教室で行う場合、ディスクの交換などの手間や曲の途中からの再生など困難なこともあるが、その点が解消できる。また、このアプリは OneNote など別のアプリの画面を共有させながらその裏で再生できるので、音データを用いる教科の授業においては使い勝手がよい。上記の授業でも、OneNote で教科書を

示しながら、裏で Apple music を立ち上げて音を流している。



・iPad は、共有している画面に指で文字や線を書き込むことができる。この機能を用いることで、黒板で授業をしている場合と同じような感覚で、自由に書き込みができ、共有できる。マウスポインターで示すよりもわかりやすく、教師にとっても補足説明で即在に書きたいときにストレスがない。

・zoom 上では、普段の音楽室のように友だちの音をその場で聴かせたり、友だちと音を合わせたりすることはできないが、その分自分の音をじっくりと聴かせ、音と向き合わせることができる。

・zoom 上では、児童がどのような演奏をしているのかを授業中に教師が把握する手段は限られてくる。ミュートを解除して、１人ずつ順番に音を聴かせてもらうしかないのである。しかし、そのおかげで、他の児童も友だちの音や演奏をじっくり聴く機会をもつことができる。

・鑑賞の活動においては、教科書準拠教材に限らず、インターネット上のさまざまなコンテンツを用いて指導することができる。鑑賞の指導については、昨年まで行っていた授業よりも充実していると感じる。

【課題】

・児童生徒の行動が把握しづらい。とくに低学年では、ミュートの設定や教科書の同一ページを一斉に開かせるのにも時間を要する。教室であれば教師が机間指導して、たやすく把握できることであっても、映る範囲が限られた zoom の中では難しい。Zoom 上での音楽の授業おいては、音を出す活動の時には全員ミュートを設定してもらわねばならない。その間、教師は児童生徒の演奏を聴くことができないわけである。教室であれば、１回１回の演奏をピアノ伴奏をしながら聴き、次にすべき指示・発問を練るわけであるがそれができない。状況把握が難しければ、それに伴ってすべき指導の質にも影響があると思われる。

・画面に映る情報だけで授業を進めるため、特に低学年の児童の場合には、対面の授業よりも集中力が続かない。30 分という短い時間ではあるが、聴く活動と演奏する活動を交互に組み合わせるなどの工夫が必要である。

・在外教育施設ということもあり、家庭での生活言語が日本語でない児童も複数名いる。しかし、1 年生の場合には、どの教員も直接会ったことがないため、どの程度日本語が伝わり、どのような支援を要する児童なのかが分からず、児童の実態を把握するまでに時間を要した。

・同時に音を出し「音を合わせる」活動ができない。これが zoom で音楽の授業をする上での最大の欠点である。同時に合わせる活動ができない以上、合唱や合奏、和音の学習などの合わせる題材の学習はできない。これらの学習は、どの発達段階にとっても大切な活動であり、また音楽の楽しさを感じられる大切な活動でもある。現状では、これらを含まない題材を優先的に学習させ、学校再開後合わせる活動を多分に含む題材を学習させる予定である。

・zoom では、楽器や声の音色がうまく伝わらない場合がある。デフォルトの設定の場合、ノイズ除去機能が自動的に働き、話し声よりも大きな音量の楽器の音や歌声を雑音と認識するようである。そうなると音が小さくなってしまい伝わらない。

・児童生徒が家庭で所持している楽器は限られている。遠隔授業を継続して行うことになると、様々な楽器に触れる機会が減る。また、音楽科の教師としては、伴奏はやはり生のピアノの音を聴かせ、一緒に歌わせたいと強く思う。

長くても数ヶ月だろう思って始めた遠隔授業だが、もうすぐ半年になろうとしている。学びを止めることなく、挑戦してきた先生方の姿や協力してくださった保護者の姿は、児童生徒の中に遠隔授業の学習内容だけではなく貴重な記憶として残ると思う。一方で、対面授業に比べると制限があることも事実である。遠隔による音楽授業の中で、歌声や演奏技能をどの程度伸ばせたのか、実技の面においてはまだまだ課題が残る。今後も、先生方と意見を交換しながら、さらに研鑽を続けて行きたい。

遠隔授業実践の事例と考察（山本・小学部１年・国語科）

◎　PC と実物投影機の連携による画面共有を用いた小学部１年生（国語科「ひらがなのれんしゅう」）の授業展開の事例

１．本時のねらい　◎平仮名の確実な習得を図る。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援と◎評価
１．「しょしゃ　たいそう」をする。	○書写の教科書２・３ページ ・「キラキラぼし」の曲に合わせて、体を動かす。
２．本時の平仮名の練習をする。 ・平仮名の筆順 ・気をつけるところ 「とめ・はね・はらい」 ・「えんぴつの　もちかた」 ・空書き練習 ・ノートに練習	○黒板に本時の平仮名を大きく書き、指導する。 ○書写の教科書６・７ページ ・正しい鉛筆の持ち方を唱え歌で確認する。 ○zoom と実物投影機を連携させ、教師の鉛筆の持ち方や平仮名の書き方を画面共有で示し、「とめ(トン)・はね(ピン)・はらい(スー)」を唱えながら指導する。
３．言葉集めをする。 ・本時の平仮名の付く言葉を発表 ・見つけた言葉をノートに書く	○zoom と実物投影機を連携させ、教師の鉛筆の持ち方や平仮名の書き方を画面共有で示し、ノート指導をする。 ◎進んで言葉を見つけようとし、これまでの学習をいかして文字で表そうとしている。
４．音読練習をする。 ・一人ひとりの音読	○一人ひとりの音読を聞き、良かったところやがんばったところを評価する。
５．本時のまとめと次時確認をする。	○本時の学習の流れを振り返り、次時の平仮名を伝える。

３．上記授業ならびにこれまでの遠隔授業実践を通しての成果と課題

日本においても、１年生の平仮名の読み・書きや数など、基礎的な力の個人差が大きいことが問題とされている。在外教育施設では、生活言語の問題が加わる。ヤンゴン日本人学校に入学してから、学校で学習したことがない１年生。対面授業や休み時間等、日本語の中で学校生活を送ることのできない１年生に、平仮名を習得させるにはどのような授業を行えばよいのか。どのような工夫が必要かを考えた。

もう一つの大きな問題はICTの活用であった。他の先生方から教えていただいた新しい機能や提示方法を理解し活用するには時間がかかる。今までしてきたことをいかしながら新しいことに取組むことはできないかと、思いついたのが実物投影機である。

実物投影機を活用すれば、

① 授業で使用してきた経験がいかせる。
② zoomの共有画面に教科書やノート、プリントを大きく映すことができる。
③ 児童の様子を小画面で確認しながら指導できる。
④ 共有画面には鉛筆を持った担任の手が映り、小画面には担任の姿が映るので児童は安心感が持てる。
⑤ 動画作成もできる。

実物投影機を活用して遠隔授業を行い、新しい機能や提示方法にも挑戦していくことにした。

これまでの取り組みにおいて感じた成果と課題は以下の通りである。

【成果】

・遠隔授業を行うことで、児童の学びを保障することができる。
・zoomの画面上だけではあるが、児童の様子や学習の理解度を知ることができる。
・Googleclassroomの導入で、児童の学習の理解度や課題を把握し指導にいかすことができるようになった。
・実物投影機を使用することで、遠隔授業に対する心のハードルが低くなった。

【課題】

・一人で操作できず、保護者のサポートが必要である。
・分からないとき保護者にたよる姿が見られたり、作業している手元が見られなかったり、状況や理解度の把握に難しさがある。
・集団活動を行うことが難しい。

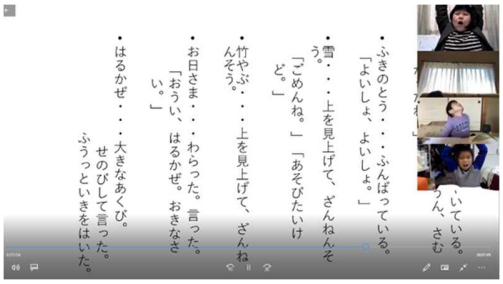
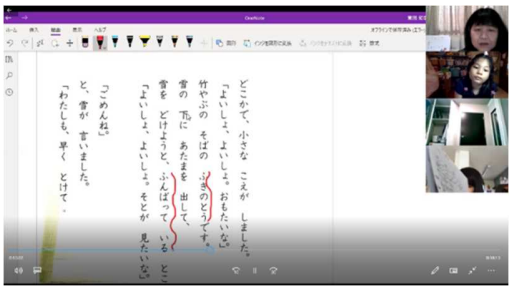
私一人では到底できなかった遠隔授業を今日まで続けてこられたのは、保護者の皆様のご協力と先生方のご支援のおかげと感謝している。対面であればと思うことの多い遠隔授業ではあるが、授業を楽しみにしてくれている児童のため、これからも私自身の学びを進めていきたい。

遠隔授業実践の事例と考察（東田・小学部２年・国語科）

◎　パワーポイントや PDF を使った画面共有を活用した小学部２年生（国語科）の授業展開の事例

１．本時のねらい　◎時・場所・登場人物に注意して、おおまかな話の内容をとらえることができる。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援と◎評価
１．　「ふきのとう」を音読し、学習のめあてを確認する。 どんなじんぶつが、いつ、どこで、どんな話をしているのでしょう。 	○zoom の共有画面を活用し、Word で作成したプリントを PDF 化したものを画面共有し、人物、時、場所。会話に気をつけておおまかな内容が読み取れるように示す。
２季節（時）、場所、人物をつかむ。 	○人物がどんなことをしたり、話したりしているか本文に線を引いて読む。 ○計画的に指名し、全員が授業に参加できるようにし、子どもの言葉を大切にする。 ○zoom の共有画面を活用し、PowerPoint で作成した板書を少しずつ提示していく。
３．会話と行動から人物の気持ちを考える。 	○zoom の共有画面を活用し、OneNote アプリを使って本文を示し、カラーペンで人物の行動に線を引いていく。
４．人物の行動を動作化し、気もちをより深く考える。 （ふきのとうが、ふんばっているところを動作化している場面）	○人物ごとの会話と行動を動作化することにより、気持ちを考える。 ◎発表やプリント（ノート）や動作化により、時、場所、登場人物に注意して、おおまかな話の内容が捉えられたかを評価する。
５．　次時の確認をする。	○本時の学習の流れをふりかえり、次時は、工夫して音読することを伝える。

３．成果と課題

Zoom 会議はヤンゴン日本人学校に赴任する前に、前任校で経験していたが、実際にオンライン授業するのは初めてであり、戸惑うことが多かった。しかし、試行錯誤しながら授業を行う中で、目の前にいる子どもは、毎年受け持っている子どもたちと同じで、向上心を持ち、まっすぐに応えてくれる子どもたちだと感じた。また、当然のことながら、コロナ禍の中にあっても学力をつけさせてほしいという保護者の願いを感じ、できないということは許されないと考えた。４月から少しずつ新しい機能や提示方法を他の先生方に教えてもらいながら何とか授業を進めてきた。これまでの取り組みにおいて感じた成果と課題は以下の通りである。

【成果】

・この状況下にあっても、オンライン授業があったから子どもたちと学びをすることができた。
・共有画面を活用し、教材の提示がスムーズにでき、視覚的にもわかりやすく示すことができた。
・デジタル教科書の使用ができるようになり、教材の提示がスムーズにできるようになり、動画や資料の工夫がなされていて、子どもたちが意欲的に取り組むようになった。
・「Google Classroom」の導入により、子どもの学習の理解度が把握しやすくなり、次の指導に生かせるようになってきた。
・ICT 教育が叫ばれている中、日々のオンライン授業の中で、子ども自身がスキルを身に付け、生かしていけるようになってきている。
・図工の評価をするとき、細かいところを見直したい場面を録画しているので、じっくり見ての評価がしやすい。
・誕生日会をすると、画面上の友達の描いたケーキに手を伸ばして食べるしぐさをし、想像力を働かせて楽しもうとする生活力がついてきた。

【課題】

・映る範囲が限られた zoom の中であっては、児童生徒の反応や行動を把握することが難しい。
・空間が広がっていないため、画面だけでは長時間の集中が続かない。
・音読や歌など同時に音を出し「音を合わせる」活動ができない。
・板書としては、OneNote や PowerPoint を使っていたが、縦書きにならなかったり、スムーズな書き換えが難しかったりしたことで、最近は、その場で子どもの意見や考えを書くことができるように Word を使うことが多くなってきている。
・生活科のおもちゃ作りをした時に、交流して遊ぶことが難しいので、発表が一方通行になりやすく、興味・関心がもちにくかった。

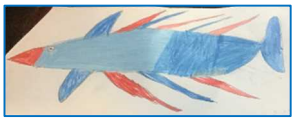
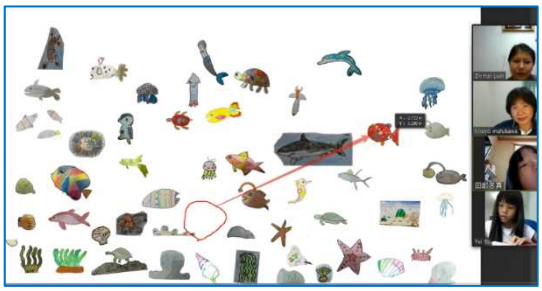
対面で授業できる日を待ちわびながら続けてきた遠隔授業だが、まだその日を迎えられていない。しかし、多くの先生方のおかげで機能や提示方法を教えてもらい、子どもたちと１日１日を過ごすことができた。また、PTA の皆様による立ち上げの支援があったことにも感謝したい。今後も、先生方に教えてもらうことも多いと思うが、挑戦するという気持ちを忘れずに、目の前の子どもたちと頑張っていきたい。オンライン授業であっても対面授業であっても将来を担う子どもたちのために少しでもよりよい指導ができるように、自分自身も学んでいきたい。

遠隔授業実践の事例と考察（ジンマールイン・小学部３年・４年・図工の時間）

◎フォトショップと zoom の画面共有を活用した小学部３年生．４年生（図工の時間）授業展開の事例

１．**本時のねらい**　◎一人一人書いた一枚ずつの絵を教室に協力して貼るみたいに大きい海の魚の絵を作ろう

２．**本時の展開**

活動内容	○指導・支援　◎評価
	○zoom 機能の共有画面を活用し、フォトショップで（３年生．４年生）が作成した絵を一つにまとめてを提示する。
● 描いた絵を写真としてもらいました。	
● 一つになるように合わせました。	
● きれいなるように一人一人場所を動かしてみました。	皆が動かしたい場所を決めて動かしました。
● 皆でつけたい色を選びました。	

３．上記授業ならびにこれまでの遠隔授業実践を通しての**成果と課題**

- ✧ 授業の前に授業に教えたいこと言いたいことをパワーポイントを使って絵と動画を順番に並べてみせることができて、説明がもっと分かりやすくなりました。
- ✧ Zoom のホワイトボードのペンで教室の黒板みたいに書いたり、簡単に消したりできてよかったです。
- ✧ Zoom にレコーディングがあるから、授業時間にならった分からない部分と聞き飛ばしをまた動画を見て勉強することができます。
- ✧ デジタル教科書はとても役に立ちました。
- ✧ 授業中と会議何かをメモしたいときはすぐ Notepad(メモ帳)にメモしましたから、忘れないですることができました。
- ✧ Zoom ブレークアウトルームを使ってグループで相談ができて便利です。

遠隔授業実践の事例と考察（福島・小学部３年・総合的な学習の時間）

◎　パワーポイントと zoom の画面共有を活用した小学部３年生（総合的な学習の時間）の授業展開の事例

１．本時のねらい　◎ヤシの木や実が、ミャンマーの人々の生活でどのような役割を果たしているのか学習し、日本と異なる生活や文化に対する理解を深める。

２．本時の展開

活動内容	○指導・支援　◎評価
１．　前時までの学習を想起する。	○zoom 機能の共有画面を活用し、パワーポイントで作成した資料（児童の予想や疑問）を提示する。
２．ジン先生による講話と質疑応答	○zoom 機能の共有画面を活用し、ヤシの木や実の使われ方について資料を提示したり動画を流したりしながら説明する。 ◎疑問に思ったことを進んで質問しようとしている。
3.　スタッフのココラッさんによるヤシの実割実演と質疑応答	○zoom 機能の共有画面を活用し、ヤシの実割を視聴させる。これまでに学習したミャンマー語を使って、味やにおいなどを質問させる。 ◎ミャンマー語を使って進んで質問しようとしている。
4.　本時のまとめとふりかえり ・今日の感想を発表し、新聞を作成する。	・新聞のモデルを示し、どのようにまとめていくか確認をする。 ・作成した新聞をグーグルクラスルームに提出させる。 ◎分かったとことを整理して新聞にまとめることができる。

３．成果と課題

【成果】

・共有画面の活用により、写真や動画のような視覚的資料が簡単に提示できる。それにより、言葉だけでは理解が難しい児童にとっても、分かりやすく、また興味をもちやすい効果があった。

・デジタル機器を活用する能力が高まった。保護者の協力もあり、クラスルームへの課題提出やプリントの印刷、コメントの入力など自分でできるようになった。

・現地に出向くことが難しい場合でも、オンラインにより世界中のどこでも誰とでも繋ぐことができる。

【課題】

・児童の間違いやつまずきをすぐに指導することが難しい。課題で間違いがあると、クラスルームで何回か

やり取りをする必要があるため、非常に時間がかかる。
・画面で資料や動画を共有することはできるが、においや味を共有し感じることはできない。オンラインと対面の長所短所を生かして、使い分けて行く必要がある。

遠隔授業実践の事例と考察（水口・小学 3 年・総合ミャンマー語）

◎ 画面共有を活用した小学校 3 年生（総合的な学習・ミャンマー語）の授業展開の事例

１．本時のねらい
〇総合的な学習時間におけるミャンマー鉄道に関する学びと連動させることにより、日常的に使える言い回しを習得できる。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	〇指導・支援　　◎評価
1．本時のテーマと目当てを確認する。	〇PPT 作成した画面を zoom の共有画面で活用し、提示する。
2.関連単語の提示・確認 (1) 駅 (2) 列車 (3) 切符	〇 カタカナ表記で３つの関連単語を提示する。 〇発音と単語の意味を確認する。 〇繰り返しの発音練習を行う。 〇イメージで覚えられるようアニメーション機能を使いイラストを提示し定着を促す。
3.会話文　（２パターン）を提示・確認 (1)どこへ行きますか？ −中央駅へ行きます (2)いくらですか？ −100 チャットです。 −200 チャットです。	〇実際に切符を買うときのシチュエーションにて２パターンの会話文を提示する。 〇各単語の意味を確認する。 〇駅員・客役を割り当て順番に会話を繰り返し発音練習。 〇定型文として覚えることを伝える。 〇駅だけでなく、日常生活の多様な場面で使用できることを伝える。 （１）に関して、道で会った時に挨拶として使えることを伝える。 （２）市場などで、実際に使用した児童がそのときの話をする。
４.質疑応答 ＊最後が「レー？」「ラー？」で終わる形の疑問文の違い	〇違いを説明する。
５．次時のテーマ確認	

3. 成果と課題

同事例は、本来であれば児童らが、実際、ミャンマー鉄道を視察した際に使用できるミャンマー語を学習することを目的としていた。ミャンマー語学習後の「 総合的な学習」の時間にミャンマー鉄道のバーチャル視察として動画や画像を示したが、その際切符売り場での会話の復習ができた。

【成果】

- 資料は、あらかじめパワーポイントで作成してあるため、限られた時間の中で効率よく進められる。

【課題】

- 画面に集中できるよう、アニメーションを使用し、画面に変化が出るように工夫する必要がある。
- PPT を利用すると、画面上で把握できる児童らの様子が限られて来るため、画面の切り替えをこまめにしなければならない。
- 日常的に使用しなければ、定着は難しいため できるだけ、日常でも使用頻度の高い言葉を特に選んで耳に残るような工夫が必要 。ミャンマー語の授業は、単発であり振り返りの学習ができないが、自主的に外で使える機会を作るように促す。

遠隔授業実践の事例と考察（堤・小学部３年・保健指導）
Note を使った画面活用をした保健指導の授業展開の例

１．本時のねらい

〇体に悪影響を及ぼす薬があることを知ることができる。また、それらを勧められたら断ることが大切であることを知ることができる。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	〇指導・支援　　◎評価
１．薬には体に良い薬と悪い薬があることを説明する。	〇Note で作成した「薬物依存」をテーマにした資料を画面共有する。
２．薬にはどんな種類があるか子どもたちに質問する。	〇どんな時に薬を使うのか、またその時に使用する薬の種類を質問し、挙手した児童に当てていく。
３．薬は医師に処方された薬を正しい量、決められた時間に内服することが大切であることを説明する。	
４．覚せい剤や大麻など体に悪影響を及ぼす薬の説明をする。	〇体に悪影響を及ぼす薬にはどのような物があるのかを写真で見せる。
５．体に悪影響を及ぼす薬を勧められたら、断ったり、その場から逃げる、助けを呼ぶことを説明する。	〇薬の勧められ方の具体例を説明する。
６．授業の最後に子どもたちに授業内容の質問や感想を聞く。	◎薬物依存の怖さや、薬物依存にならないために危険な場所には行かない、誘われても断る、助けを呼ぶなどの感想を子どもたちから聞くことができたので、本時のねらいを達成できた。

３．成果と課題

【成果】

・写真やイラストを用いながら説明したため、悪い薬物を容易に把握することができた。

・薬には良い薬と悪い薬の２種類があることを授業の中で説明をした。その時に、子ども達が使用している薬剤がどんなもので、どんな時に使用しているのかをお互いに知ることができた。

・薬物依存になることで、体に悪影響があり、自分自身にも、自分の周りの人にも迷惑がかかることを知ることができた。

・悪い薬物には手を出さないという意識を持つことができた。

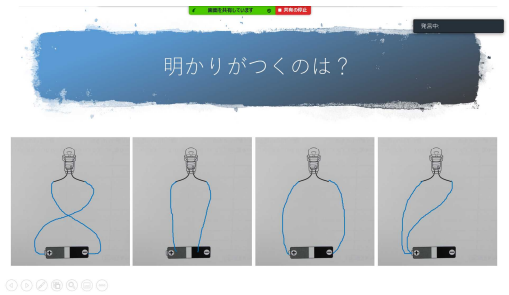
【課題】
・薬物を勧められたときの対処法は Note を見せながら説明したが、寸劇をしながら子ども達と薬物勧誘の断り方を一緒に学んでいけばより理解が深められたのではないかと思った。
・１度だけでは全てを説明できないのと、知識の定着を図れないので、定期的に薬物依存の話をする必要がある。

遠隔授業実践の事例と考察（江口・小学部３年・理科）

◎　PC の画面共有機能を用いた小学校３年生（理科）の授業展開の事例

１．本時のねらい　◎どうすれば明かりがつくのか、条件を見出す。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援と◎評価
１．　電池・ソケット付き導線・豆電球を用いて、豆電球に明かりをつけるにはどうすればいいか予想を立てる。 	○zoom の共有機能を活用し、パワーポイントで作成した「豆電球」と「電池」の図を描いた画面を共有する。 ・子どもたちに画面に書きこんでもらい、意見を共有する。 ・画面の共有機能を活用しながら、子どもたちが自分の意見を友だちに分かりやすく説明できるようにする。
２．各自で試す。つく方法・つかない方法を探す。	○zoom で各自がどのように導線をつなぐと豆電球に明かりがついたかを見せてもらい、話し合いの場を持たせる。
３．本時の振り返り。教師が示したやり方ではどうか、各自で試す。  	○教師が示した回路を提示することで、「電気を通すつなぎ方」「電気を通さないつなぎ方」のちがいに関心をもって実験に取り組むことができるようにする。 ・導線をつなぐと明かりがついたところを、＋極、－極とよぶことを教える。 ◎電池の＋極と－極に導線をつなぐと豆電球に明かりがつくことを、ノートにまとめることができる。

３．単元を通じた成果と課題

【成果】

・毎回単元の最初に、気づいたことや知りたいことを発表するようにしているが、クラス全員がそれぞれ

1 回以上は自分の意見を発表することができている。

・目の前の画面に注視できる。子どもが画面に書きこむと、友だちは何をかくのかな、と興味津々で活動できる。同じ、ちょっとちがう、などの意見がでやすい。

・明かりがついたときの子どもたちの反応をみて、達成感や喜びが伝わってきた。動画学習だけでなく、実際に手を動かして体験的に学習を行うことは、理科の学習では大切だった。

【課題】

・児童の反応やつまずきなどを把握しづらい。ノート指導も細かいところまでできない。

・画面に書きこんでもらうのは、難しい。思い通りに記号や線画ができない。

大和教材さんのご厚意で、実験キットを用いて遠隔実験ができるようになった。誰かがうまくいかなくても、何が問題だろう、と操作を一つ一つ子ども同士で確認し、問題を発見することができた。遠隔実験ではうまくいかないことがあったとき、それが一人ではない場合、一気に教師側が支援を行うことが不可能であった。そこで Zoom のブレイクアウトルームを活用し、はやく終わっている子どもたちと手分けして手伝いながら進めていくことができた。

Evaluation of Distance learning (Tin MARLAR, Elementary Grade 4th, English Conversation Class)

Elementary 4th Grade students using ZOOM application for learning of English Conversation

1.Topic

Learning about the places in town, road signs and directions of places with situational dialogues that can be used in a daily activity.

2. Teaching Method

Activity Content	Guidance & Support
1. - Greeting and simple conversation with students	Starting Zoom application and sharing the screen by using power point.
2. – Introduction to the topic (1) Places in town (2) Road signs (2) Direction of places	*see the pictures of places in town through the slide show *Explain the meaning and make the students repeat after the teacher *Practice the pronunciation to be confirmed *showing road signs and doing gesture with body movement
3. – Situational Dialogues (1) What can you do in a school? • I can study. (2) Where is the school? Or Or (3) How can I get to school? • First, you go straight Apple Street and turn left. • It's next to the post office.	- By asking questions about the places, first of all students try to understand the meaning in their own language in order to read out the new vocabulary in English and make conversation using simple verb such as study, go shopping, play, have a meal, drive, help and teach etc… - By looking at the city map, students will have an easy comprehension skill that can be used in different ways of daily activities of everyday expression with the words next to, in front of and between etc…
4. – Proficiency skill	- Role play and pair works activities

3. Achievement & challenge

From this online teaching method, It is quite hard for me to handle in conversation time because It takes long time to answer the question so we have to make a role play like a teacher and a student start a dialogue that concerned with today topic. Sometime, we use video teaching in which a real situation can

be seen asking the direction and showing direction. Some students, they understand the words very well but they are shy to speak it out in front of the class. But any way, we can see not only the achievement of the students' efforts in their learning but also the challenges of each student's ability to communicate in a role play or pair work activities. And they can also apply this kind of dialogues in everyday expressions.

4.Result

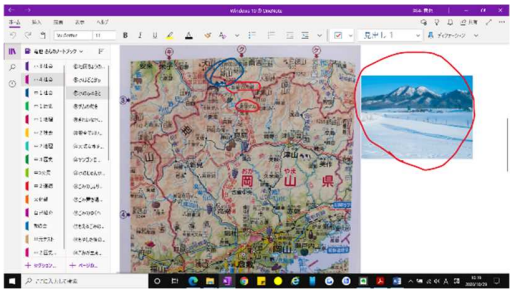
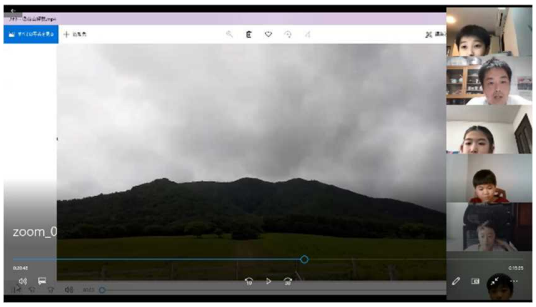
I think they must be given exposure to practice a lot but we don't have much time to practice the new vocabulary in order to memorize the new words to be good at fluency skill. In addition, we also need a role play or group works or pair works to improve their four skill activities.

遠隔授業実践の事例と考察（岡本・小学部４年・社会科）

◎　PC の画面共有機能を用いた小学校４年生（社会科）の授業展開の事例

１．本時のねらい　◎水源の森から、ダムに至るまでの水の流れや地形を調べることで、山地や川の位置や広がりについて理解を深めることができる。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援と◎評価
１．　地図帳を活用し、水源の森の位置や地形の特色をとらえる。 	○zoom の共有機能を活用し、OneNote アプリで作成した教科書や地図帳の画面を共有する。 ・教科書や地図帳、インターネットの挿絵を共有画面上で示すことで、視覚的な支援を行う。 ・描画機能を活用し、着目してほしい箇所を色付マーカー等で示すことで、視覚的な支援を行う。
２．　写真や動画を活用し、現地の様子をとらえる。 	○zoom の共有機能を活用し、Windows の画像整理アプリにある写真や動画を提示することで、立体的に地形の特色をとらえることができるようにする。 ○教師が現地を取材した写真や動画を提示することで、より関心をもって学習に取り組むことができるようにする。 ○水源の森から、地下水が湧きだし、少しずつ川に形を変えながらダムまで流れていく一連の過程が分かるよう、順を追って動画や写真を提示する。 ◎教科書や地図帳と、現地の様子を比較し、気づいたことをメモにとることができる。
3.　本時のまとめとふりかえり	○本時の学習の流れをふりかえり、まとめとする。

３．上記授業、ならびにこれまでの遠隔授業実践を通じた成果と課題

社会科は、教科書や地図帳はもちろん、写真や動画など具体的な資料を示しながら学習を支援する必要がある。遠隔授業開始当初より、One Note アプリを活用し、Zoom も含め使用する機能や提示方法を改良しながら授業を進めてきた。これまでの実践を通じた、成果と課題は以下の通りである。

【成果】

・One Note という 1 つのアプリで情報を整理できるので、教材の提示がスムーズにでき、視覚的にもわかりやすく示すことができる。

・デジタル教科書や Google Earth、Google Document など各種アプリを活用し、機能を活用することで、児童生徒の興味や関心を高めることができている。

・One Note は、共有している画面にマウスで文字や線を書き込むことができる。この機能を用いることで、黒板で授業をしている場合と同じような感覚で、自由に書き込みができる。

・理解を深める活動において、教科書準拠教材に限らず、「NHK for School」などインターネット上のさまざまなコンテンツを用いて指導することができる。One Note の機能を活用し、リンクを貼っておけば、すぐに提示することができるので、効率的に授業を進めることができる。
・学習を通して学んだことや、自主学習などに取り組んだら、教師にメールや Google classroom で報告するように指導している。関心・意欲の高い児童生徒にとっては、自分の調べたいことを追究する中で、思考力や情報収集力、IT リテラシーを高めることができている。
・Zoom のグループ機能を活用する際、プレゼンテーションソフトで作成した資料を提示しながら発表する機会を設けている。写真や文字情報を、いかに分かりやすく伝えるか実践を積み重ねる中で、プレゼンテーションする力の伸びにもつながっていると考える。

【課題】
・児童生徒の反応やつまずきなどを把握しづらい。教室であれば児童生徒の反応に応じて発問したり、机間指導をしたりすることでつまずきを把握することができるが、手元が映らず画面越しの zoom 上では難しい。
・教室であれば、授業後教師が児童生徒と会話をする中で、お互いの人間関係を深めることができるが、遠隔授業だと時間的にも物理的にも限界がある。朝の会で話をしたり、個別に時間を取ったりして面談も適宜行っているが、指導に限界を感じる場面が多いと感じる。
・遠隔で画面越しの環境下は、対面よりお互いどことなく距離があり、緊張感がある。グループで活動する際に、対面授業以上に「対話する必要感」を児童生徒に抱かせなければならないと、常に試行錯誤している。

４月に始まった遠隔授業も、半年が過ぎた。これまで初めての試みにも関わらず、試行錯誤しながら熱心に授業を行う先生方、円滑に遠隔授業が実施できるよう協力してくださった保護者の方々のおかげで、自分自身も励まされることが多かった。一方で、対面授業に比べると指導や支援に限界があることも事実である。今後も、先生方とより良い支援の在り方や、児童生徒に関する情報交換を密にしながら、今後も研鑽を続けていきたい。

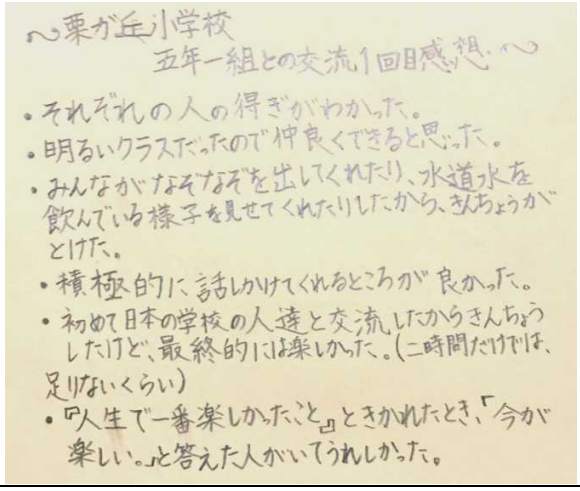
遠隔授業実践の事例と考察（久保田・小学部４年・総合的な学習の時間）r2, 11, 11 実施

◎　日本の学校の子どもたちとオンラインでつながった４年生（総合的な学習の時間）の授業展開の事例

１．本時のねらい　◎新聞交流を行ってきた子どもたちが、ZOOM を活用して、実際に日本の栗ガ丘小学校 5 年 1 組の子どもたちと自己紹介をしたり、新聞にあったことを紹介したりして、日本の子どもたちや生活を知り、親睦を深められる。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援と◎評価
１．　自己紹介 ・好きなことや食べ物と共に自己紹介をする。	・事前に５年１組には、ミャンマーの状況、どのようなことをするか説明しておく。
日本の学校の様子や５年１組さんのことを知り、親睦を深めよう。	
２．　新聞で交流したことで yjs の４年生が興味を持ったことについて紹介してもらう。 ・５年１組の児童に、スラックライン（小布施町で盛んなスポーツ）をやっているところを見せてもらう。 ・水道水が飲めるところを５年１組児童に見せてもらう。 ・サッカーの得意な子にリフティングを見せてもらったり、g4 の子にブリッジや空手のけりを見せたりした。 ・絵を見せ合った。 ３．それぞれの生活や特技などについて質疑・応答 ・「宿題はどうしているのですか。」の質問に、「出さない時もあるが、グーグルクラスルームを活用して提出している。」と答えた。 ・なぞなぞを出し合った。 ４　本時のまとめとふりかえり ・今日の感想を発表する。 ○5 年１組のことがよくわかって嬉しい。 ○聞こえないこともあったけど、おもしろかったです。	・ ５年１組の子たち一人一人の前に ipad を置き、自己紹介させた。担任が教室を回る。 ・先にスラックラインをする子たちは、場所を移動させ、その期間も学校内の様子を映してもらった。 ・1, ２時間目の間に、担任が５年１組のみんなと話し、ヤンゴンの子たちが傷つかないものかどうか確認してから、質問させた。

○楽しかった。みんなの特技とかが色々あっておもしろかった。 ○緊張した。3 年生の教室を思い出した。 ○みんな元気そうに話していた。自己紹介などして、簡単にしゃべれるようになった。  ～栗が丘小学校 五年一組との交流1回目感想～ ・それぞれの人の得ぎがわかった。 ・明るいクラスだったので仲良くできると思った。 ・みんながなぞなぞを出してくれたり、水道水を飲んでいる様子を見せてくれたりしたから、きんちょうがとけた。 ・積極的に話しかけてくれるところが良かった。 ・初めて日本の学校の人達と交流したからきんちょうしたけど、最終的には楽しかった。(二時間だけでは、足りないくらい) ・『人生で一番楽しかったこと』ときかれたとき、「今が楽しい。」と答えた人がいてうれしかった。	◎日本の学校の雰囲気を知り、積極的に親睦を深めようとする。失礼のないような振る舞いができる。 ・感想をグーグルクラスルームに出すように伝える。

3．単元を通しての成果と課題

ロックダウンが続く日々で子どもたちもオンライン授業への飽きを感じ始めている時期であった。そんな中、同じくらいの年齢で、しかも自分たちが学ぶ日本の子どもたちとの交流は刺激的で、普段画面を映すのが嫌になっていた子どもたちも、画面を映し、積極的に話を聞こうとする意欲を感じた。また、自分たちがやっていることをしっかりと伝えらえる場面もあり、自分たちの頑張りや良さを知り、伝える活動にもつながっていくと感じた。

機械面での課題は、同じ教室に２，３台のＰＣや ipad でズームを行ったため、ハウリングが出てしまったことや、発言の音がなかなか大きくできないこと（スピーカーが必要か)、5 年 1 組の子どもたちがクラスの中で盛り上がって話している音が届かないことなどが（マイクが必要か）課題と感じた。ヤンゴン日本人学校でも、オンラインとの併用授業をする可能性がある。その時には、同じような課題が見えてくると感じた。

4.補足　画面内の構成（使用したもの Ipad2 台 A,B、ＰＣ2 台）

①　　スラックラインを見せてくれている 5 年 1 組の児童：ipadA　、②職員室でホストを担当した児童：普通のＰＣ、③黒板上からクラス全体を映す：ipadB、④クラスの担任用パソコン：ＰＣ　←このＰＣを黒板につなぎ、黒板に下の画面が写っている。

遠隔授業実践の事例と考察（若竹・小学部６年・社会科）

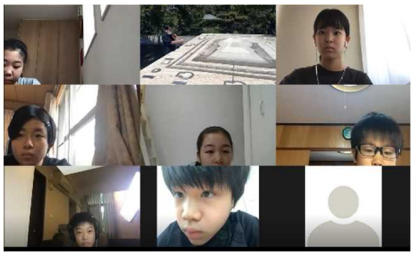
◎　双方向遠隔授業における日本の現地資源を活用した小学６年生（社会科）の授業展開の事例

１．ねらい　◎市役所で行われている様々な仕事や取り組みを理解し、学習を深めることができる。

◎これまでに学んだ古墳についてまとめ、その中でうまれた疑問について、古墳博士（ユネスコ協会堺支部会長川上様）に質問を行い、学習を深めることがきる。

２．展開

①　６年生の政治の単元の中にある、市役所の働きの学習において、本教諭が所属する大阪府堺市の市役所では、どのような取り組みが行われているのか学ぶことにした。堺市教育委員会をはじめ、人権推進課、施設管理課、広報戦略推進課の４つの部署の方を講師に招きオンライン上で講話を頂いた。講話の中で感じたことや疑問に思ったことなど、児童が質問を行った。



②　また、６年生の歴史の単元の中にある、古墳時代の学習において、世界遺産である百舌鳥・古市古墳群の仁徳天皇陵古墳まで本教諭が行き、古墳博士にオンラインガイドをして頂いた。ガイドまでに学習から出てきた疑問を随時質問し、答えて頂く。ガイドを聞く中で新たに出てきた疑問を、児童で共有しながら新たに質問を行った。

３．オンラインにおける講師を招いての校外授業を通しての成果と課題

今までの授業では、対教師や児童同士というかたちで行ってきた。また、学習を行う場所も、家庭や教室など決められたいつも見える同じ景色での授業である。今回の授業を計画するにあたり、学習指導要領に則り現地資源を最大限にいかすこと。教科書から得る学びから、画面上ではあるが対面し、対話の中から得る学びへと変化させることに重点を置いた。

社会科においては、様々な資料を適切に選択、収集、活用するなどして社会的事象を多面的・多角的に考察し、公正に判断する力が求められる。先に述べた、資料からの学びで終わるのではなく、そこから実際に現地に行き、生の声を耳にし、生の物を目にすることで、資料にのっている意味を再確認するだけではなく、より深い学びへとつなげることができたと考える。

展開①では、教科書にでてくる福祉に関係のある市役所の仕事で完結している。今回の授業では、市役所の中のごく一例ではあるが、仕事内容や取り組みなど、教科書で学んだ福祉以外の部署の職員の講話を聞き、質問をすることで、市民の願いを受けて働いていること。また、市民のためになる働きをしていることを学ぶことができた。それに加え、各都道府県、市区町村独自の取り組みに触れることもできた。堺市役所では、昨年度世界遺産に選ばれた「百舌鳥・古市古墳群」があり、

仁徳天皇陵古墳もある。そこで、広報戦略推進課の業務の中にある堺ＰＲのために誕生したハニワ部長による講話をいただいた。６年生の次の単元である歴史への意識づけにもつながり、さらなる「なぜだろう？」を児童から引き出すことができた。公民の単元が終わり、次の歴史の単元に入ると、縄文・弥生時代と学んでいくにつれ、早く古墳時代を学びたいという声があがるほどであった。

展開②では、教科書などを利用し、「古墳の謎に探ろう」と学級で古墳の不思議をたくさん見つけていった。実際に本教諭が現地に行き、古墳博士にガイドをしてもらいながら質問を行うことで、児童の探求心をさらに向上させることができた。資料から読み取り疑問を持たせる。実際の場所から質問に答えてもらうことで、さらなる新たな疑問を持つ児童も多く、より深い学びへのつなげることができたと考える。「古墳の謎」について児童同士で様々な意見交流をしてきた中で、全く見当もしなかった答えが返ってきたときの、児童の驚く表情や。逆に、立てていた予想が当たっていたときやおしいときのあの目の輝きは、授業のねらいを超えた成果があったと確信している。

課題としては、発言者以外ミュートという、発言の制限から、児童のつぶやきの声をすぐにひろえなかったことである。特に、普段の授業と違い、講話やガイドという場合、その約束は絶対であるとしたため、一層児童の発言に制限があったことは否めない。その分、そのつぶやきや気付きは、授業後のふりかえりのノートから読み取らなくてはいけないと考える。また、物理的な課題として、現地でのネット環境の確保と時間の制限についてである。今回、堺市役所と仁徳天皇陵古墳での２カ所のオンラインでの授業を行うに当たり、講話者やガイドとの打ち合わせはもちろんのこと、当日の動きを確認するとともに、その状況で実際の授業が行えるのか、ＰＣと携帯などで zoom を開き確認しながら打ち合わせを行った。その際のネット回線は、ポケット Wi-Fi を使用した。今回は、２カ所ともネットがつながり、現地での授業を行うことができた。また、時間の制限とは、授業時間内で授業を終えることはもちろんのこと、現地までの往復の時間も考えなくてはいけない。今回は本教諭の居住地から１０分圏内ということもあり、問題なく行うことができた。しかし、時間がさらにかかるような場所になると、校外学習の前後を授業調整であけていただいたりしないといけない可能性がある。

今回の授業を通し、現地資源を活用した授業の成果を大いに得ることができ、新たな可能性をもみることができた。一方で、様々な制限も浮き彫りとなった。今後の授業を考えるにあたり、一人の教諭で行うのではなく、行ったことを他の教諭と共有すること。また、離れている今だからこそ、離れているそれぞれの現地資源をいかせるのだとの思いで授業計画に取り組むことが、日本人学校における児童生徒のためになると考える。

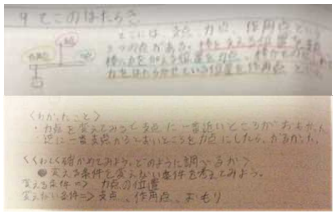
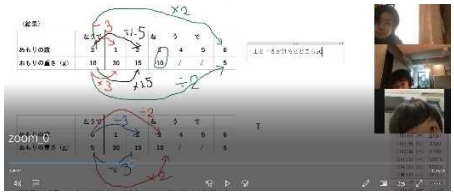
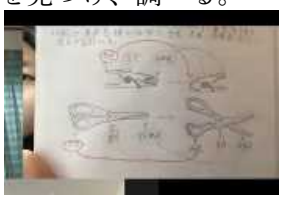
遠隔授業実践の事例と考察（松川・理科）

◎　小学校６年生（理科）の「てこのはたらき」単元計画及び授業展開の事例

～Zoom での画面共有（ONE NOTE、デジタル教科書、NHK for School 等）と Google Class room の活用を通して～

１．単元のねらい　◎てこについて多面的に調べる活動を通して、てこの規則性について理解を図り、問題解決しようとする。

２．単元計画及び授業展開

	活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援と◎評価
てこのはたらき	重いものを小さい力で持ち上げるには、どうしたらよいか 1.「体験用てこ」を各自作り問題を見い出す 材料 ・割りばし ・ひも ・ペットボトル One note 使用 2.支点から力点、支点から作用点までの距離とおす力の関係を調べる。	○Zoom 画面上でも、実感を伴った理解を目指すために身近な物で、「体験用てこ」を作り手ごたえや重さを実感できる活動場面を作る。 ○わかったことをノートにまとめ Google Class room に提出させる。  ◎「体験用てこ」で調べたことを記録できる。
てこのつりあいとかたむき	「実験用てこ」を使って、てこがつり合うときのきまりを調べよう 1.てこのきまりについて予想する。 2.実験した結果をもとに何がいえるのかを話し合う。  3.見つけたきまりが妥当かどうか、さらに調べる	○児童の手元に「実験用てこ」がないので、Zoom 画面上で双方向のやりとりをし、教師が児童の考えを聞き取り実験する。 ○友だちと話し合うことで、より妥当な考えを作れるようにする。 ○NHK for School やデジタル教科書も資料とする ◎てこの規則性について問題解決している。
てこを利用した道具	てこを利用した道具を探して、そのしくみをしらべよう 1.てこの働きを利用した道具を見つけ、調べる。  2.結果からいえることを話し合う。	 ○調べたことをノートにまとめ Zoom で発表し、Google Class room に提出。 ○NHK for School やデジタル教科書を用いて、調べられなかったものについて知らせる。 ミャンマーへの理解が深められるようミャンマーの天秤についても知らせる。 ◎身近にてこを利用した道具があることを理解している。

３これまでの遠隔授業実践を通しての成果と課題

理科室も教材もなく、児童・生徒は、ミャンマーと日本にばらばらに散らばってしまい自然環境も違う世界でどうやって授業を展開していくのか、最初は、ただ途方にくれた。ところが、実際にオンラインでつながってみると、次第に「できる事」の可能性が見えてきた。オンラインは、リアル体験、デジタル教材、人々、日本、ミャンマー、宇宙、現在、過去など多様なものをつなげる魔法のような箱でもあった。その箱に何を入れ、どのようにつなげるか。「自分の考えをもち，深め，表現する」子どもの姿を目指した。前述の「てこのはたらき」で実践してみた。

自分の考えをもつ　遠隔授業でも「体験用てこ」でリアル体験をすることで自分の課題や考えがもてる。

深める　Zoom 画面上で双方向のやりとり、友だちとの話し合い、デジタル教科書、NHK for School 等で深める

表現する　調べたことを Zoom 画面上でやって見せる。ノートに記述する。（Google Class room へノート提出）

ONE NOTE を板書がわりとし、授業の流れが全てわかるように録画と共にフォルダに保存し見られるようにした。

【成果】特に**自分の考えをもつ**　の部分について成果があった。

オンラインならではの良さを生かせた⇒様々な情報を得やすく、それをもとに自分の課題や考えをもてた。

〇デジタル教材を示しやすい。パソコン上なので、すぐに適切な動画、写真、資料などと接続できる。

〇児童・生徒・職員がミャンマーと日本全国にいることで、各地の情報が入手しやすい。

・4 年「季節の変化」・5 年「天気の変化」日本全国、ミャンマーの様子がリアルタイムで情報交換できた。

・6 年「土地のつくりと変化」北海道イタンキ浜近くの先生の協力で Zoom と録画で地層観察ができた。

〇ゲストティーチャーをよびやすく、児童・生徒の質問に答えてもらいながらの授業を実現できた。

・4 年と中３　天文分野　プラネタリウム解説員を呼び、子どもたちの質問や考えをもとにした構成で行う。

・5 年「人の誕生」・5 年「台風と防災」ミャンマーで出産経験のある助産師からお話を聞いたり、ナルギス台風の経験のあるミャンマー人の話を聞いたりすることでミャンマーの考え方や文化に触れられ、考えをもてる。

オンラインを利用し、各自の実験（リアル体験）について話すことで自分の考えや思いを認識できた。

〇身近なものを利用して各自で実験し、情報交換する。

・種⇒食べたものを洗って干し、まく　・ヨウ素デンプン反応⇒うがい薬を使う　・「体験用てこ」の利用

〇家で用意しにくいものは、教材キットを送付し、デジタル教材と合わせることで多くの気づきを得られる。

・6 年手回し発電機のセット　・5 年ふりこ、電磁石のセット　・4 年空気でっぽう、電池のつなぎかた

【課題】**深める**がまだむずかしい。課題が残る。

支援の仕方

児童・生徒の手元が見えにくので、瞬時に児童生徒の考えを把握したり、声かけ等の支援をしたりがしづらい。

話し合いの仕方

声がかぶると聞こえない。伝えたいタイミングが操作の時間でずれる。ミュートで気づきの声が拾えない。

話し合いが教室と同じようにはできない。頷き動作を大きくするなどオンライン独自の話し合いの工夫が課題。

リアル体験とデジタル情報の組み合わせ方

理科の学習の中でデジタル情報が大変有効な場面がある。一方でリアル体験が欠かせない実験観察もある。

オンライン授業では、リアル体験とデジタル情報の組み合わせを工夫し、考えを深められるようにしたい。

オンライン授業は未経験で初心者であったが、それにもかかわらず、支えてくれた保護者の皆様のご理解とご協力、同僚の先生方に丁寧に教えていただいたことで何とかここまでこられた。心から感謝している。オンライン授業の経験は、対面授業になっても生きると思うし、さらに授業がバージョンアップすると期待できる。はやぶさ２がサンプルを持って帰れる時代である。きっとまだ、見えていない可能性があると思う。研鑽を続けていきたい。

ヤンゴン日本人学校のオンライン授業実施一箇月後の一考察
― オンライン懇談会から出された意見を基にして ―

ヤンゴン日本人学校　教諭　加　藤　雅　博

1　はじめに

新型コロナ感染症の影響により、世界中が日常生活を失い混乱している。学校も同様であるが、子供たちの教育を受ける権利の保障は、憲法第 26 条に定められた国の責任の一つであり、その一方法としてオンライン授業が強く叫ばれた。しかし日本の公立学校のオンライン授業実施率は５％であり、その数値からオンライン授業の実施がいかに難しいかを伺い知ることができる。

そのような状況下、ヤンゴン日本人学校では、３月から保護者等の献身的な支えにより、４月 20 日からオンライン授業を始めることができた。40 分間の時間制限のなか手探り状態での授業を進め、授業をより充実させていくために、本校のオンライン授業を振り返ることが必要である。そこで５月 16 日（土）の懇談会のまとめを可視化し、次への足掛かりとすることが本稿の目的である。

2　懇談会から出された報告のまとめ

懇談会で出された保護者の意見を、各担任がまとめると以下のようになる。なお、まとめなので、言葉の意味合いが変化している可能性がある。

（１）オンライン授業による成果

①感謝の言葉。　②子供の生活リズムが整ってきた。　③友達や授業者に会える楽しみ。
④運動ができる。　⑤１年目の教師への信頼が生まれてきている。　⑥資料を送信してくれる。

（２）保護者からの意見等

①時間割を平仮名に。　②宿題をもっと出してほしい。　③宿題が何かを分かるようにしてほしい。
④授業時間を増やす。　⑤教科間による宿題のバランス。　⑥二重学籍による宿題の増加。
⑦成績は？　⑧今後の進路。　⑨授業時間の延長と縮小。　⑩拘束される時間が長い。
⑪共有画面が共有されないときがある。　⑫オンラインのランチや休憩　⑬朝の会･帰りの会がほしい。

3　考察

上記２（１）オンライン授業による成果を、３点にまとめて論述する。

（１）保護者の感謝の気持ちが伝わってくる。教師にとって、感謝の言葉は報われているという充実感と意欲につながる。その先には信頼があり、遠隔であっても心のふれあいにつながる。「教育の最大の環境は、教師自身である。」と言われるが、教師自身が迷いのない自信を持って授業を実施できることを、筆者は切に願うものである。未だに会えない担任への信頼ができつつあるようだが、教師の最善を尽くす姿勢が伝わっているのであろう。画面に映る子供の顔を見ながら、その背景には家庭の献身的な姿勢が分かる。時には我が子への感情的な言動もあると思うが、各家庭の様々な事情を越えての授業成立である。感謝と敬意を持ち続けたい。

（２）子供の学習意欲は、学習の面白さが知的好奇心をくすぐることで、主体的に学んでいく姿勢になる。その先に、知識や技能を高めることができる。そのためには、子供自身の心の安定と体の健康が大切である。陰山英男氏が推進した方法を、もう一度思い出したい。それは、「早寝、早起き、朝ご飯」である。子供の健全なる成長のためには、生活リズムが基本であることを示している。新型コロナの影響で、多くの老若男女が生活リズムを乱している。筆者自身、それに該当する。成長著しい若者を、成長期に合わせた成長を促すために、生活リズムは欠かせないことであり、各家庭への声掛けをしていきたい。

（３）オンライン授業を通して、「人は、人の教育によってはじめて人となる。」と言ったカントの言葉を、つくづくと噛み締める。長期間自宅に居ることで、人は鬱憤をためている。この機会に読書や職能向上を図ろうとする人は、少ないのが現状であろう。ごみ収集で、酒瓶等が大量に出されたことからも、実情を推し量ることができる。子供はどうなのか。ゲーム等で時間を費やし、家庭でも静かにしているならと大目に見ているのが現実ではないだろうか。そんな中、たとえ画面上であっても。友達と会えるのは、子供の心の安定につながっている。友達も頑張っているから、自分も頑張ると思っている子供は多いと思われる。同時に、筆者は体育も担当しているが、体育が持つ力を改めて実感している。動きたくてしょうがない歳の子供である。体を動かすことで気持ちをリフレッシュさせる。画面越しに見える清々しい顔に、汗が装飾品にも見える。人とのつながりで人に育てられていく様子を実感する。

上記２（２）保護者からの意見等を３点にまとめて論述する。

（１）本校には、９学年が在籍している。これは、多くの日本人学校の特徴である。様々な学年が同居することは、様々な実態を知ることができる。しかし、短所もある。同じようなシステムや方法では、成長の実態が異なる児童・生徒に弊害を生じさせていくことになる。また、一人一人の成長に合わせる学習法の処方を図った授業に向け、十分配慮しなければならないことであろう。

小学校教師は、低学年を担当した時に字の形と書き順を覚え、読みやすい字が書けるようになる。子供に合わせ、ゆっくり丁寧に書かなければ子供が置き去りにされる。ちなみに「ヲ」の字をきちんと書ける教師は、どれほどいるだろうか。２画で書く人がほとんどであろう。正しくは、３画である。低学年担当の教師は、文字に相当気を遣っている。教室掲示を見れば分かるが、低学年の場合ほとんどが平仮名である。時間割は、やはり平仮名が妥当である。３年生以上なら、漢字が良い。また、字体は様々あるが、ユニバーサルデザインの視点から教科書体が適切である。行き過ぎたデザインは、子供が混乱する原因になる。オンライン授業であっても、子供の実態に合わせることは心したい。朝の会や帰りの会。限られた時間の中でどうするのかは、各担任に委ねて良いと考える。朝の会を十分に行えば、教科等の授業時間が減る。様々な現象を考えながら、一つに絞って指導していくための学習法の処方は、その担任でなければ察知することは難しいと考える。

（２）宿題についてであるが、様々な考えが出ることを筆者は予想していた。宿題に関する考えは、古くて新しい。ここで宿題とは何かをまとめておきたいが、文献等を調べても宿題の定義はないことが分かった。筆者も、宿題を子供には出し続けてきた。ドリルやワーク、自作プリントを出した。学習の定着や発展を期待していたが、忙しくなると授業進度を速めるために行った。だが、後者は、本末転倒である。前者であってもはなはだ疑わしいものである。ここで興味深い論文を紹介する。デューク大学カイル・クーパー教授の研究のまとめで、

①学年の段階によって大きく影響は変わる。高校の宿題は、ポジティブな効果がみられる。小学生（特に低学年）は、成績に関する宿題の効果はほとんど無いようである。

②学年順・習得度に合わせた適切で段階的な宿題の時間を設ける。

③子供の学年×宿題 10 分」（The 10 Minute Rule）を推奨する、である。

やはり宿題は、子供の成長や実態に合わせた学習法の処方を考えて出す必要がある。子供を机に向かわせたり、単に勉強時間を増やしたりする手段であってはならない。このことが原因で、すっかりやる気を失くしてしまい、人格を壊す結果になってしまった子供はたくさんいる。また、真面目に宿題を遣り過ぎ、健康を害してしまった例も枚挙に暇なしである。ここまでくると、学校教育法第 11 条（体罰の禁止）に抵触しかねない。

子供に手伝いをさせる、決まった仕事を続けさせる。「生活が陶冶する」と、ペスタロッチの著書「白鳥の歌」で述べているが、改めて的を射ていると考える。また、教育基本法第 10 条には、保護者の子の教育に第一義的責任が述べられている。このことを直接言うつもりはないが、できることとできないことの線引きと、場合分けは必要である。できないことを引き受け、疲弊してしまった教師を何人も見てきた。それは、全国的な社会問題にもなっている。教育基本法の改正の背景には、そんな事実があったことも忘れてはならない。敬意を払いながら謙虚に、保護者と学校が良好な関係を日々結んでいくことが大切であろう。説明し、話し合い、役割を担っていく機会を積み重ねていく。そこには、子供の存在を忘れないことが何より大事であることは言うまでもない。

（３）筆者がコンピューターを買ったのは、平成６年である。Windows3.1 で、勤めていた市でパソコンを持っていたのは数名だった。得意絶頂になり使用し、全てをパソコンで処理した。そんな折、先輩から、「加藤さんの教室は、印刷文字ばかりだなあ。字は上手なのに・・・。」と言われたことがある。その言葉を聴いて我に返り、パソコンに使われている自分がいることに気づいた。デジタルは、便利であり、その圧倒的な力は、人間では到底太刀打ちできない。デジタルとアナログの特長を生かし、両者の使い分けを大切にしてきた。

そして今年、Zoom と格闘している。まさかこんなことになるとは思ってもいなかった。筆者のリテラシーと求められているものとの差を感じながら、授業を進めている。授業は、刻々と変化する瞬間の積み重ねである。戸惑いながらも授業を積み重ね、Zoom には様々な機能があり、それを使えば便利である。道具の機能に感心しながら、改めて担任を務めていた頃を考えてみた。

それは、流行と不易である。時代と共に教材教具は変わるが、全く変わらないものもある。主体的で、対話的な深い学びに向け、右往左往しない姿勢は、子供が安心して学習に集中することができる。

４　結び

5 月 16 日（土）夜、友人からメールが届いた。「校長会でのライン導入と、Zoom 授業。付いて行けません。」直ぐに電話をしたら、戦々恐々とした様子が伝わってきた。この気持ちは、痛いほど分かる。筆者も、ヤンゴン日本人学校の若手教員の動きを見て、自分の終わりを感じた。「ヤンゴンに行く前に、スクラップか・・・。」それでも考えた。36 年の経験を、役立たせることは何かを。筆者の役割を探しながら、早くオンライン授業が終わることを願う。同時に、オンライン授業の可能性も考えて結びとする。

例えば、不登校児童・生徒の家庭や病院内学級をつなぎ、学びの場を保障。自然災害等の場合にも、学びの連続性の保持。オンライン会議による、働き方改革。知識基盤社会に必要なキー・コンピテンシーの育成。これらのことは、イノベーション創出に向けた活性化と、グローバル人材に必要な資質を高めていくと考える。正しく、「生きる力」そのものである。

遠隔授業実践の事例と考察（富永・中学部１年・国語科）

◎　パワーポイントやＰＤＦを使った画面共有とグーグルクラスルームを活用した中学校１年生（国語科）の授業展開の事例

１．本時のねらい

○　既習事項の復習をするとともに、新しく学習する文学作品を読み、感想をもつことができる。

２．本時の展開

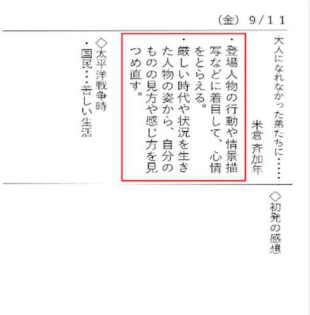
活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援　　◎評価
１．漢字確認ミニテストに取り組む。 	○パワーポイントで作成したテスト画面を共有する。２分で答えの漢字をノートに書くよう指示して取り組ませる。 ○２分経ったら、答えを表示する。点数は、プライベートチャットで各自入力させる。 ◎既習の漢字を覚えることができている。
２．前時の最後にグーグルクラスルームで課題として出したプリントの確認をする。 	○提出されたプリントは、グーグルクラスルームの採点機能を使って採点し、授業前までに生徒に返却しておく。 ○プリントのＰＤＦを画面共有し、問題文がはっきり見える状態にして、解答の確認・解説をする。
３．『大人になれなかった弟たちに…』の学習に取り組む。 (1)目標を確かめ、学習の見通しをもつ。	○板書はあらかじめパワーポイントで作成しておく。日付・題名・作者名・目標を表示する。
(2)教師の範読を聞く。 	○範読する前に、太平洋戦争時の人々の生活の様子について触れる。 ○教科書をＰＤＦ化したものを画面に表示しながら範読する。 ○内容や表現について感想を書くよう指示する。
(3)初発の感想を書く。	○初発の感想は、グーグルクラスルームに提出するように伝える。
４．次時の確認をする。	○次時は、初発の感想をもとに学習計画を立てることを伝える。

３．成果と課題　（○…成果、●…課題）

【パワーポイントやＰＤＦを使った画面共有について】

○生徒の漢字習得状況を把握するために、パワーポイントを使った確認テストを実施している。画面に表示された漢字の読みを見て、ノートに漢字を書いていくことにより、どれだけ知識として身についたか生徒自身が把握できる。教師が答えを順番に表示し、生徒各自が点数をつけた後、プライベートチャットで入力させる。そうすることにより、教師側が生徒の漢字習得状況を把握することができる。

●遠隔授業での漢字テストは、教師の目が届かないため、生徒が教科書やドリル等を見て答えている可能性もある。漢字習得状況を把握するには、確実性が低いのが課題である。



○板書はパワーポイントを使って作成している。以前は板書にホワイトボードを使っていたが、遠隔授業の画面になると板書の文字が小さくなって分かりにくくなってしまうので、パワーポイントに切り替えた。この形だと画面全体に板書を表示することができ、見やすく分かりやすい。また、あらかじめ板書を作っておけば、言葉を順番に表示することもできる。

●板書として使えるのは他に One Note があるが、横書き表示のため、縦書きもできるパワーポイントを使用している。ただ、パワーポイントは授業中に生徒から出された考えなどをその場で入力するのが困難である。生徒の考えを取り入れた構造的な板書を作成するには、パワーポイントは課題が残る。

○教科書は単元ごとにＰＤＦ化し、表示できるようにしている。画面共有の機能を使えば、文章の大事な部分を示しやすく、説明もしやすい。画面を見ながら範読ができるので、生徒の表情も同時に確認することができる。

【グーグルクラスルームの活用について】

○グーグルクラスルームを使うことによって、生徒の理解度や習熟度が把握しやすくなった。生徒から提出されたテストやプリントを丸付けできる機能もあるので、どの部分が理解できて、その部分が理解不十分なのかがよく分かる。また、ノートに文章にしてまとめたものを、写真に撮って提出できるので、生徒の書く力も教師側が捉えやすくなった。教師が添削したものを返却することもできるので、生徒もどの部分に気をつけて文章を書いていったらよいのかが分かるようになる。グーグルクラスルームは双方向のやり取りができる点で効果的である。

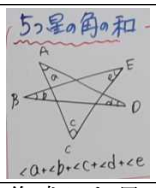
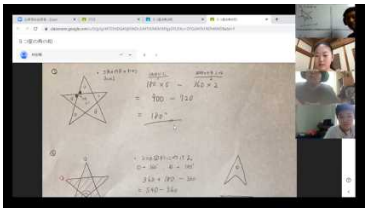
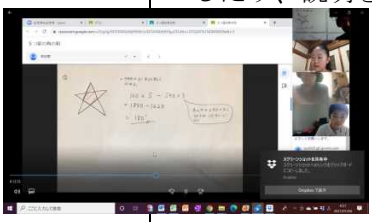
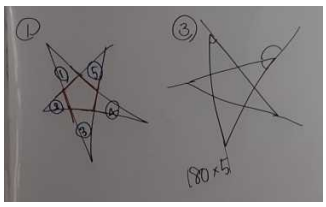
遠隔授業実践の事例と考察（稲川・中学部２年・数学科）

◎　ZOOM の画面共有とグーグルクラスルームを活用した中学校２年生（数学科）の授業展開の事例

１．本時のねらい

○　既習事項を活用し、星形五角形の先端にできる角の和の求め方について、多様な解決方法を確認し、図や式を用いて論理的に説明することができる。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援　　◎評価
１．前時までの内容を復習する。	○生徒の発言から既習事項を確認する。 ・「ブーメラン形の角∠a+∠b+∠c=∠d」 ・三角形の外角はそれととなり合わない２つの内角の和に等しい。
星形五角形の先端にできる角の和の大きさについて、色々な方法で考えてみよう。 	
２．導入課題について考える。 ・結果を予想する。 ・結果を考える。	○前時に作成した星形五角形を確認し、興味をもって取り組むことができるように声掛けする。 ○どんな星形五角形でも同様のことが言えるかについて考える。
３．課題に取り組む。 ①個人で考える。	◎角度を測ったり、切り合わせたりしなくても180°になることを図や式を使って説明する方法について考えているか。 ○アイディアが浮かばない生徒に、以下のようにヒントを与える。 ・三角形に着目して考える。 ・平行線の性質を使って考える。 ・真ん中の五角形を使って考える。 ・ブーメラン形を使って考える。
②グループで考える	○グループを意図的に作成して、自分の考えを共有し、発表へとつなげる。
４．解放を発表する。 ・画面共有を使って、それぞれの考え方について発表する。	○画面共有する図形には、できる限り図や式、言葉による説明を入れられるように指導する。 ○生徒の説明で不十分なときは、教師から質問をしたり、説明を補足したりする。
  	
５．本時の学習を振り返る。	◎多様な解法があることを理解できたか。

３．上記授業ならびにこれまでの遠隔授業実践を通しての成果と課題

年度当初より遠隔授業をどのように行うか、どのような手法が最も効果的かについて考えながら授業実践してきた。試行錯誤して授業を行い、提示方法やコミュニケーションの取り方などを改良しながら授業を進めてきた。これまでの取組において感じた成果と課題は以下の通りである。

【成果】

・本時では ZOOM の画面共有を活用して、生徒のノートを全員が画面で確認する手法を用いた。百聞は一見に如かずの通り、思考を視覚的に捉えるという点では、画面を共有しての授業は効果的に理解を深めることができた。

・授業の定着度を確認するために、毎回の授業で演習プリントを用意し、生徒に取り組ませている。対面式では印刷したプリントを配付するが、Classroom を活用することによって、本時のプリントについて配付・説明をすることなく提示することができる。また、授業進度に合わせてプリントの内容を変更することも容易であり、補足的な内容プリントを授業の中で追加することもできた。

・課題については、Classroom に提出させることで、授業前に確認して解説をすることもできた。また、分からない問題について生徒から質問のメール送信があり、授業には解説を準備して臨むことができた。

・演習の時間には個別面談も行った。教室では別空間を準備したり、教室の中の学習環境を気にしたりと煩わしいことがあったが、ZOOM においては、生徒を待機室に送ることによって、個別での面談が容易であり学習状況や困っていることの把握に役に立った。

【課題】

・画面を通しての授業では、生徒の実態を把握することは難しい。授業中のノートを逐一確認することはできず、ノートから読み取れる授業のペースや理解度を取り違えてしまうケースが多々あった。特にテストを導入してから、授業内容が定着していない生徒を確認し、フォローに追われることが多かった。

・Wi-Fi の環境により、画面をオフにして出席したり、やむを得ず出席できない状況が続いた生徒については、メールを交換したり担任の先生に相談したりしながら情報交換などのやりとりを続けたが、一方的な連絡になってしまうこともあり、難しさを感じた。

・課題の提出状況が悪かった。特に Classroom を活用するまでは、生徒のワークやプリント類への取組について確認する術が乏しく、学習の定着に大きな格差ができた。Classroom を利用してからは、授業後や週末課題としてプリント類を提出させたが、それでも課題を提出しない生徒もおり、担任の先生や保護者に協力を依頼せざるを得ないことがあった。

コロナ禍の中で始まったオンラインでの授業。当初は短期補足的なスタイルになることを予想していたが、コロナの終息も目途が立たない状況下で、長期的により良いものを作り出していく必要を改めて感じた。他の先生方と連携を図りながら、今後一層の研修を行っていきたい。また、このような状況下でも学ぶ姿勢を崩さない YJS の生徒・保護者・先生方に感謝の気持ちをもち続けたい。

遠隔授業実践の事例と考察（沖本・中学部３年・英語科）

◎　ブレークアウトルームと共有画面を活用した中学校３年生（英語科）の授業展開の事例

１．本時のねらい　◎これまでに学んだ表現を使って、日本の風物について説明する英文を書き、共有画面を使って発表することができる。

２．本時の展開

活動内容・主な発問と児童の反応	○指導・支援と◎評価
１．紹介できそうな日本の風物 のイメージマップを全体でつくる。	・自分の知っている日本の風物を発表する。
外国の人が興味をもってくれそうな日本の風物を紹介しよう。	
２．何について紹介するのかを決める	◎zoom 機能の中のブレークアウトルームを活用して 3 人ペアを作り、自分が紹介したい風物についての情報を交流する。
３．発表内容のアウトラインを考えて必要な情報を整理して英文を書く。	○必要な情報はインターネット等を使って調べてもよいと伝える。
４．共有画面を使って、作った紹介文を全体で発表する。	◎zoom 機能の中の共有画面を活用してそれぞれが作ってきた紹介文を映し出し、視覚的にわかりやすく紹介できている。 ◎友達のプレゼンに対して質問やコメントをしている。
５　本時のまとめとふりかえり ・今日の感想の発表をする。	・作ったプレゼン資料をグーグルクラスルームに提出するように伝える。

３．単元を通しての成果と課題

双方向遠隔授業を確立させるために、教師と生徒が対話するだけではなく、子ども同士が自由に意見や考えを交流する場を作るというのが私の目指している一単位時間の授業構成である。特に英語科という教科の特性上、声を出すことが上達の第一歩である。遠隔授業では発言するもの以外はミュートにしておく必要がある。そうすると否が応でも緊張した雰囲気ができてしまう。しかし、ブレークアウトルームの中では教師が見張っているわけではないので、自然と笑顔が溢れてくる。そんな楽しく英語を学習する場を設けることができたのは子どもたちの心の安定にも大切であったと考える。ブレークアウトルームは導入段階のペアトークや深める段階でのグループトークなど様々な場面で活用することができ、双方向授業において欠かせない機能であった。

また、共有画面の活用は自分が作ったプレゼン資料を画面上に大きく映し出すことができ、参加生徒全員にとって分かりやすく、見やすい資料提示となった。中学 3 年生ともなると、パワーポイントを使ってプレゼンしたり、ワードで文章を作ったりと様々なツールを使って分かりやすいプレゼンをすることができるので、興味深く聞くことができた。

ここまでのところ授業においては試行錯誤の連続ではあったが、その都度教員間で相談をしながら進めることができたので大きな課題は残らなかった。しかし、今後は中 3 ともなると評価が大きな課題となる。授業内でテストを受け、提出する方法や、オープンテストのような形式をとる必要

が出ることなど、今後も教員間で悩みを共有しつつ子どもの見とりの方法を研究していきたい。

2020 年度　「図書」授業の記録

学校図書館司書　副島正子

2020 年度、オンラインによる「図書」授業においての実践

１．対象学年　　幼稚部（年中、年長）　　小学部（1、２，3 年生）
２．状況の変化と授業の方法
（１）5 月 4 日（月）より 5 月 21 日（木）
　カメラに絵本を向け、通常の教室における「絵本読み」の形をとった。
　低学年の場合、30 分の授業時間に一冊の絵本では、長すぎると考え、絵本読みのあとに、画面上のカルタ、なぞなぞなどと組み合わせた。

（２）5 月 22 日（金）より 9 月 25 日（金）
　朝日新聞の記事により、オンラインの授業での絵本等の読み聞かせは、著作権上の問題が発生していることを知る。
　文化庁、SARTRUS のホームページによると、本校のようなスタジオ型のオンライン授業の場合、出版社を通して著作権者の了解を得るか、または使用のたびに補償が必要とわかる。
　しかし、この時期は緊急事態宣言下で、出版社も社員が出社していない状況で連絡が取れない。高橋書店のみ、インターネットでの申込みで、「**ざんねんないきもの事典**」およびその続編の使用許可を得ることができた。
　以後、次のような方法で授業を行う。
１）使用作品：
　＊著作権の切れたもの（作者の死後 70 年を経過）　宮沢賢治、新美南吉など
　＊司書自身が、昔話を授業時間に合わせ、お話の形に書いたもの。
　（同じ話でもできるだけ複数の本を参考にした。）
　参考図書：「少年少女世界文学全集（講談社）」　「おはなしのろうそく（東京子ども図書館）」　「青空文庫」等

<u>留意したこと</u>
①昔話には、残酷な場面も多いが、言葉を選んだうえでストーリーはできる限り変更しなかった。　（例：かちかち山、ヘンゼルとグレーテルなど）
②どこの昔話にも、継母による虐待の話が多い。この点については、「意地悪な母親が･･･」として「継母が･･･」という説明にはしなかった。児童生徒の家庭状況がわからないため、配慮が不足する可能性を考えてのことである。（例：十二の月のおくりもの、灰だらけ姫等）

２）画像　　：
　絵がないと、集中が持続しないことがわかり、話に合わせ、司書が書いた絵を用いて紙芝居形式で話を進めた。宮沢賢治、新美南吉の作品も、出版されている絵本の絵は著作権が切れていないので、画像を作成した。

<u>留意したこと</u>
①話の展開がわかるように、場面の切り替えごとに描く。
②登場人物（動物）が多い物語は、その言動の流れがわかるように、描き分

ける。（画像例 A,B）

③時代や国が物語により異なるので、情景や服装などがわかるように描く。（画像例 B,C,D,E,）

④奇想天外な行動や設定も多いので、その場面が想像できるように描く。（画像例 B,E）

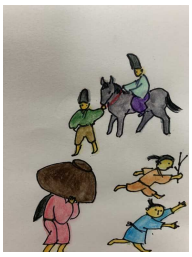
画像の例

A（ブレーメンの音楽隊）

B（六人男が世界を歩き回る）

C（島の白つばき）

D（おばあさんと鬼のへら）



E（鉢かずき）

３）例外　　：

①前述のように、「**ざんねんないきもの事典**」およびその続編（高橋書店）は使用許可を得ていたため、昔話と組み合わせ、物語に登場する動物や、児童からのリクエストによるものの話を読むことができた。（G1~3）

②８月作家の村上李衣先生から、本校に多くの図書の寄贈があり、その中のご自身の著書については授業で使用する許可をいただき、9 月の授業では、３冊の絵本を読むことができた。このとき、小さい画面で見ている児童もいることを踏まえ、絵本を写真撮影し、画像として映しながら読んだ。

（３）9 月 28 日（月）より

SARTRUS に学校として絵本を使用する届けを出していただき、絵本の使用が可能になる。画像として使用したのは、上記と同じである。

その中で、前期に比べいくつかの工夫ができたので、記録したい。

１）平和学習月間　日本人墓地の清掃活動はできなかったが、平和学習は行うことになり、その一環で図書を活用していただくことができた。

司書の入手可能な図書は限られていたが、成長段階に合わせ本を通しての平和学習を実施することができた。

２）季節や、記念日に合わせた選書

①鉄道記念日に合わせて（１０月）（幼稚部の先生からのご提案で）

②年末に向けて（クリスマス、お正月、幼稚部の行事に合わせて）

４．振り返って

著作権に関する制限が解けた後、各学年の先生方、各分掌の先生方と連絡がとれたこともあり、行事や学習に関連して図書を活用する機会を得ることができた。このような図書の活用が方向としては本来である。先生方との連携の方法を早くから考えるべきであったと反省している。また、図書館の活用については、司書だけでなく、分掌として検討できれば、活用の可能性が広がるのではないかと考える。